

UTCP セミナー

ジゼル・ベルクマン

「バートルビーと現代哲学」

司会：小林康夫（UTCP）

コメント：郷原佳以（関東学院大学）

メルヴィルの『代書人バートルビー』を読解する現代の思想家ブランショ、ドゥルーズ、デリダ、アガンベン、バディウ。「せずにすめばありがたいのですが」という消極的抵抗は彼らをいかに魅了し、いかなる生の考察をうながしたのか。バートルビーの形象への参照から文学と哲学の交差を描き出すベルクマンの最新著『バートルビー効果』に基づくセミナー。

2012年7月20日（金）17:00-19:00

東京大学駒場キャンパス 18号館コラボレーションルーム3

使用言語：フランス語 | 入場無料 | 事前登録不要

*講演原稿（フランス語）を配布予定

主催：東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属 共生のための国際哲学研究センター（UTCP）

ジゼル・ベルクマン（Gisèle Berkman）略歴

国際哲学コレージュ副議長。雑誌「ポエジー」編集委員。18世紀啓蒙期のフランス文学・思想を専門とし、ルソー、ディドロなど啓蒙期の作家に関する多数の論考を発表。20世紀の文学・思想にも造詣が深く、近著『バートルビー効果——読者としての哲学家』（*L'Effet Bartleby, philosophes lecteurs*, Hermann, 2011）ではメルヴィルの『代書人バートルビー』の読解を起点として、エクリチュールと思考をめぐって文学と哲学の連続性に関する研究成果が披露された。これまで数々のシンポジウムや書籍の企画にも携わっており、編著に『自我の考古学』（*Archéologie du moi*, P.U.de Vincennes, 2009）、ジャン=リュック・ナンシーをめぐるシンポジウム記録集『外の形象』（*Figures du dehors*, Cécile Defaut, 2012）がある。